

第31回日本脳神経血管内治療学会学術総会 (JSNET2015岡山) を終えて

Review of the 31st Annual Meeting of the Japanese Society for NeuroEndovascular Therapy (JSNET 2015 Okayama)

会長 杉生 憲志 (岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 脳神経外科学, 岡山大学病院 IVRセンター)

Kenji Sugiu (Department of Neurological Surgery, Okayama University Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences, IVR Center, Okayama University Hospital)

2015年11月19～21日、あっという間に過ぎ去った、楽しくも熱い三日間であった。何より最も楽しんだのは紛れもなく会長である私自身であった。学会のエンターテインメント性という面では、学会員に史上最高のものをお見せできたと自負している。地方都市岡山を前面（全面！）に押し出した学会報告として、皆様にご紹介したい。

学会のテーマは「文武両道」とした。ありきたりな言葉だが、岡大脳神経外科が大切にしてきた精神が宿っている。ポスターの題字を郷土が生んだ日本一の書家高木聖鶴先生にお願いし、写真は槇野博史病院長の力作を拝借し、岡山の観光地をちりばめた。学会のカラーとして、我が愛するファジアーノ岡山のチームカラー・ワインレッドで統一し、ロゴマークとして桃から生まれた二刀流・宮本武蔵を採用した（図1）。随所に岡山テイストを盛り込み、例えば懇親会のビールは「独歩」、ワインは「Tetta」、雄町の酒はもちろんのこと、岡山B級グルメの屋台を懇親会場に並べた。

懇親会の司会は、私の盟友である RSK 山陽放送の石田好伸アナウンサー部長、ファジアーノ岡山特命 PR 部女子マネージャーのミサッキーこと桃瀬美咲さんには、マスコットガールとして彩りを添えてもらった（図2）。ランチョンセミナーの弁当は、自ら選定した千屋牛、デミグラスカツ丼、祭り寿司、えびめし…岡山名物を連日並べ好評を博した。学会バッグは倉敷帆布（大好評で二つ目・三つ目を所望する会員が続出）、記念品は伊勢崎紳先生作の備前焼、岡山を代表する日本画家の森山知己先生には脳のデザイン画をいただき、Continuing Educational Program の表紙、ポケットチーフ、そしてクオカードの図柄とさせていただいた（図3）。前夜の会長招宴は夜の倉敷大原美術館を借り切り、岡山の文化的側面もご紹介した（図4）。お土産屋さんとして、ハレマチ特区に出店していただき、特に学会特製きびだんごは大人気で完売した。岡山での開催を参会者に楽しんでいただくべく、最大限のおもてなしをしたつもりである。唯一申し訳なかった点が、



図1 学会ポスター



図2 会員懇親会でのトーク、RSK 石田アナとミサッキー



図3 学会記念品



図4 倉敷大原美術館での会長招宴

メイン会場がホテルグランヴィア岡山と岡山コンベンションセンターの2カ所となり、皆さんに移動の不自由を感じさせたことであるが、これもプログラムを工夫し最小限の移動としたこと、短距離でもあえてシャトルバスを配したことで、ご理解いただいた。

さて、肝心の学術であるが、脳神経血管内治療は脳神経外科の中でも特に進歩が著しい領域で、毎年100人以上の新入会員を得て、3,000人超の学会員を数える、今でも右肩上がりに発展している学会である。某脳外科教授の言葉をお借りすれば、「ちょっと脇が甘いが、今でも目をキラキラ輝かせた連中が集まっている」学会である。新たなデバイスやエビデンスが毎年登場し、不遜な言い方をすれば、別に会長が放っておいても学術集会の成功は間違いなしと考えていた。それでも私なりに工夫を凝らし、まずは動画を多用し、幕間にも

岡山の紹介からセッションへの誘導、そして歴代会長インタビューを流した。歴代会長インタビューは半年前から準備し、歴代会長のみならず多くの全国のオピニオンリーダーから貴重なご意見をいただいた。学会前の諸先輩方の忌憚なき意見は、予想以上に学会準備に好影響を与えてくれた。また、はじめての試みとしてプレコングレスイブニングビデオセミナーを前夜に開催し、私の手術ビデオを前座に、その後世界最先端の手術ビデオを流したところ、大好評であった。

演題募集に関して、締め切り厳守とし絶対に延長しないことを宣言し、その旨を徹底した。そしてブラインド査読を行い、早期演題提出（締め切り1週間前）者には査読ポイントを0.5点加点し優遇した（つまり、査読で同点の場合に有利となる）。シンポジウムに採用された演者は抄録に顔写真付きで掲載し、当日のシンポの冒頭では、私自身が各シンポの意味と役割をビデオで解説し、討論の方向性を明確に示唆した。そして、発表時間をオーバーした場合には容赦なく、スライド映写を打ち切った、もちろん事前に十分通告した上でのことである（時間オーバーした時点でイエローカードが提示され、15秒後にレッドカードの提示とともに映写打ち切り：全1,024演題中10題にレッドが出された）。その分、討論にはたっぷりと時間を取り、座長には名司会者・論客を選りすぐり、各セッションの最後に切れ味鋭いコメンテーターを配した。従来の年功序列は無視して、会長裁量ですべてに実利を優先しアカデミックな学術集会とした。当たり前のことではあるが、これらの役者を的確に揃えることが学会が盛り上がる最大の秘訣で、会長の腕の見せ所であった。

最初のセッションは本領域で最も盛り上がっているflow diverter stent（血流変更ステント）を採用し、Beatlesになぞらえてタイトルを「フローダイバーターがやってくるヤァ！ヤァ！ヤァ！」としてA Hard Day's Nightの曲にあわせて私のオープニングビデオからスタートした。海外から私の友人であるトップスターを集めて華やかでかつアカデミックな幕開けとなった（図5）。怒濤のような学会が三日間続いた訳であるが、（各会場が狭いことも逆に幸いして）以後、会場に人が一杯の熱気あふれる学術集会となった。

例年の目玉企画として会長講演があるが、真面目に会長講演をするような玉ではないことは自分が一番よくわかっているの、文化講演と会長講演をくっつけて「文武両道対談—人生で大切なことはみんなサッカ

ーから教わったー」として元サッカー日本代表福田正博氏と私の1時間のトークを企画し大盛況であった(図6)。特別企画として、「My Mentor」を組み、日本のパイオニアの先生方にご自身の師匠(外国人Mentor, 全員が学会の特別会員)をご紹介いただき、私自身も恩師 Daniel Rufenacht 教授との思い出を語った。そして、最後に本学会の初代会長景山直樹先生(故人)についての逸話を拝聴した。私は世代的に残念ながら景山先生とは面識を得られなかったが、先見の明を持って本学会の礎を築かれた景山先生をはじめ、我々が多大な影響を受けた偉人を、特に若い先生



図5 最初のセッションを大盛況で終えてシンポジスト勢揃い



図6 福田正博氏との文武両道対談、後方には浦和レッズとフジャアーノ岡山のユニフォーム

に紹介することは会長としての一つの念願でもあった。準備した会場が小さすぎて入りきれない会員からお叱りを受けたのは予想外に嬉しい出来事であり、この「My Mentor」セッションはWeb上で動画配信を開始した。

本会は多くの企業援助で成り立っているのも事実である。人々の導線が展示会場に向くように注意を払い、会員のみならずサポートしてくれた各企業にも満足いただけるよう、Win & Winの関係になるよう腐心した。企業セミナーを「Meet the expert」とし、あえて30～40人の小さな特別ルームを用意し、少人数でexpertとの密接な交流ができるような企画を各企業にお願いした。こちらも大好評で、会場に入りきれない会員への謝罪に企業が嬉しい悲鳴をあげる事態となった。

最終的に2,400人の参加者を得て、盛会裡に終了することができた(図7)。おそらく多くの会員が「よく学び、よく遊べ」の精神で、学術でも文化面でも岡山を堪能していただけたと信じてる。ご協力いただいたすべての方々に感謝してご報告を終わりたい。



図7 無事に学会を終え、閉会式で学会旗を吉村紳一次期会長につなぐ

平成28年5月受理
〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1
電話：086-235-7336 FAX：086-227-0191
E-mail：ksugiu@md.okayama-u.ac.jp